

# 柏木教会月報

1月号

東京都新宿区北新宿3-1-18

☎03-3368-2156

牧師 大浦 勝

## 朝と共に喜びが来る

詩編三〇編一～二三節

牧師 大浦 勝

その怒りはただつかのまで、その恵みはいのちのかぎり長いからである。夜はよもすがら泣きかないでも、朝と共に喜びが来る。（六節、口語訳）

詩編三〇編は、重い病氣を癒され、死の危険から助け出された人の感謝の歌である。彼はその喜びを感謝をもつて歌い、神を讃美している。「主よ、「わたしは」あなたをあがめます」（二節）。かつて詩人は自信に溢れていた。彼は安らかであり、搖るがない山のように堅く立ち、この幸いはいつまでも続くと思っていた（七・八節）。この幸いの中で、彼はそれが神の祝福であり、神から与えられたものであることを忘れてしまっていた。まことに、幸いの時にその幸いを神の祝福として神に感謝し、神に信頼し続けることは難しい。わたしたちは、「自分の力と手の働きで、この富を築いた」と言ってしまう（申命八・一七）。高ぶりの中で神を忘れてしまう。

名に感謝せよ」（五節、口語訳）。

このように、詩編三〇編は個人の感謝の歌であったが、やがて神の民全体の「神殿奉獻の歌」（一節）となつた。神は「つかのま」の苦難の後、神殿を再建するという喜びを（紀元前五一五年）、また、異教の王によって汚された神殿を清めるという喜びを（同一六四年）、神の民に与えてくださったからである。神の怒りは「ただつかのま」であるだけではなく、神の民を訓練し、教え、導く、「いのちのかぎり長い」、神の恵みの現れである。わたしたちは泣くことがあっても、やがて喜びに包まれる。涙の夜を過ごすことがあっても、喜びの朝を迎えることができる。神の怒りはただつかの間で、その恵みはわたしたちの全生涯に及ぶからである。「主の恵みは決して絶えない。主の憐れみは決して尽きない」（哀三・二二）。

ことを告げ知らせたいと切に願つ。神の恵みの大きさを知った者が、神をほめたたえることなしに死んでよからうか（一〇節）。彼はわれみを乞い求めて神に祈り、神に向かって叫ぶ（九、一一節）。

神は詩人の叫びを聞き、祈りに答えてくださった。彼を死の危険の中から引き上げ、癒してくださいました（一一四節）。彼は喜び、踊る。涙の夜は過ぎ、喜びの朝が来たのである。彼はその喜びの中で、自分の命は自分が口をつぐむことなく神をほめ歌い、とこしえに神に感謝するためであると歌う（一一一～一三節）。彼は神との交わりに生きる、まことの幸いを知つたのである。そして今やこの幸いを、共に礼拝をささげている者たちと分かち合おうとする。「主の聖徒よ、主をほめうたい、その聖なるみ名に感謝せよ」（五節、口語訳）。